パナソニック教育財団特別研究指定校研究成果報告会@関西ICT展_2025/08/07

	No.	Question text	東金町小学校の回答	瀬戸SOLAN学園の回答
東金町小学校の発表	1	TPPやと思ってた、、、苦笑	ちょっと惜しいですね。笑 TTP（徹底的にパクる）という言葉をJAET@春日井で知ってから邁進してきました。	
	2	「外部の目にさらす」という最終目標があることで、子供のモチベーションも上がるのかなーとおもいました	本当にそれはその通りで、見てほしい児童がとても多かったように感じました。昨年度は保護者や大学生、他の学校の学校の先生、企業さんなど様々な人に見てもらいアドバイスをもらいました。今年度も2026年2月27日(金)に「オープンデイ」という形で様々な方にお越しいただける日を設定しています。	
	3	ソランの授業はみんなで見に行ったのですか？	瀬戸SOLAN小学校さんには、2022年度から何回も足を運んでいます。基本は研究推進委員会の有志と管理職が伺っています。SOLANの研究発表は夏と冬にあり、どちらも比較的公立小の教員でも行きやすい日程になっていますので、参加しやすいと思います。探究に興味があればぜひ一度足を運んでみてください。JAETもですが、こういった経験にもお金を使うことができるのも、パナソニック教育財団のとても素敵なところだと思っています。	
	4	先生たちはアジャイル学習に踏み出すことに戸惑いや不安はなかったんでしょうか？どのように先生たちに浸透させていったのかが気になります！	実は「アジャイル教育」という名前でパナソニック教育財団の特別研究指定校の申請書に書いています。しかし、現場の先生たちにはあまり「アジャイル」という言葉は最初は馴染まなかったです。「難しいカタカナ…」と思われてしまったようです。また、「〇〇教育」だと教師が教える感じが強いからと、「〇〇学習」にして児童主体っぽさを出そうとしていたりしました。そこで、研究推進委員会の教員たちが「もくもく」「もしもし」のカードを作成して授業中の掲示物として使ってもらうようになって少しずつ馴染んできました。もしかしたら、今も一部の教員は「アジャイル学習」よりも「『もくもく』と『もしもし』をいったりきたりする」の方がしっくりきているかもしれません。また、管理職がいつも「アジャイルしているね！」と価値づけしてくれるので、少しずつ個人と共同を行ったりきたししながら試行錯誤することがアジャイルか！と教員も少しずつ理解してきているところもあります。	
	5	「研究テーマが変わる」というのも、東金町さんらしいなと思って聞いていました。より良いものに変えていくという先生の姿は、子供にも、プラスにうつると思っています。	そうやって言っていただけると嬉しいです！ 実は探究もうまくいかなくなった2024年度の1学期の後、夏休みに研究推進委員会の有志が夏休みの間に探究を経験してみて、その成果を子どもたちに夏休み明けに発表しようと企画をしました。その結果、子どもたちもなんとなく探究を理解してくれたのか、すごく探究に主体的に取り組む姿を見ることができました。	
	6	質問です。「体系的に表現の方法を指導する」とありますが、例えば2年生ではこのぐらいの表現を求めるなど、具体的な到達目標はあるのでしょうか	正直なところ、前年度のプロジェクトとそのときの担任が目指すゴールを擦り合わせて決めるという形になっています。北澤先生や豊田は、IE-Schoolの「情報活用能力の体系表列」や、 東京都教育委員会が示している「情報活用能力#東京モデル」を参考に指導しています。	
	7	小学校でも使える生成ＡＩって、なんですか？	小学生でも活用できる生成AIとしてはコニカミノルタ社のtomolinksがあります。 本校の実践も一つ掲載していただいております。	
	8	プロジェクト学習のねらいとする資質、能力の欄に悩みます。ここが評価にもつながるため、とても大切だと思うのですが、教員間での共通理解も難しいです。	難しいです……。 でも、本校は教科でプロジェクト学習をしているときは、教科の目標で評価をしますので、ここでの資質・能力の育成ができたかどうかでは評価していません。少なくとも授業やカリキュラムの中で「どのような経験をさせるか」ということで、この資質・能力は示しています。 教員間の理解のためにはスプレッドシートを活用して他の学年の授業をみえるようにしたり、昨年の授業の指導案や写真等をみえるようにGoogleドライブで共有したりしています。あとは教員間で対話してみるしかないと思います。そして、管理職や豊田、北澤先生がその授業を見に行くことも効果的かもしれません。	この場合のプロジェクト学習は教科でしょうか？教科横断型でしょうか？いずれも育成する資質・能力は教科に依存します。教科横断型プロジェクトは、教科で習得した知識・技能を意識して活用する学びの場ですから、思考力、判断力、表現力等、学びに向かう力、人間性等と協働する力です。協働する力は、個人探究と違ってチームで課題解決をする授業デザインになるため、評価項目に加えています。教師間の共通理解については、プロジェクトのリーダーがいて、時々各学年のプロジェクト担当者と話し合いをします。学年でも、教科横断のプロジェクトについては、全員で話し合いをし、授業展開を共有するようにしています。教科型については、今年から力を入れているもので、上学年での取り組みになります。今後、教科型のプロジェクト会議についても密に行っていきたいと思います。
	9	さきほど吉崎先生もおっしゃっていましたが、さまざまな背景・状況・前提条件が異なる学校をTTPする際、徹底的にはいかないところもあったのではないかと思います。自校の状況に合うように調整して取り入れたのはどのような点ですか？　どのように調整しましたか？	TTP（徹底的にパクる）というと、「そのまま何でもパクる」と伝わってしまったのかもしれません。申し訳ありません。 私たちの「徹底的に」は、**「『私たちの教育改革の目的達成のために』徹底的にパクる」**です。 私たちの教育改革の目的は**「教師主導を児童主体に変える！」「確かな学力をつける！」**だったので、瀬戸SOLANの取り組みの中でパクれると思ったものは徹底的にパクってきました。あらゆるところが瀬戸SOLANをパクったように見えるかもしれませんが、瀬戸SOLANだけでなく、相模原市立中野中学校や春日井、品川区立大井第一小学校などさまざまな学校の取り組みの中で、目的達成のためには何でも「徹底的にパクって」きました。 私たちが目指しているのは、瀬戸SOLAN小学校ではありません。私たちが目指したのは教員の入れ替わりがあり、教員の力も差がある中で**「教師主導から児童主体に変え、児童に確かな学力をつける」**ために、他の学校も企業も何でも使えるものは使ってパクってきました。さらに、教員のウェルビーイングとエージェンシーにも着目して、**教員は苦しすぎないけれどやりがいがあり、児童主体の授業改善をして児童の確かな学力を伸ばす**ということを目指してきました。その結果、今までの学校の取り組みを見直し、何が必要で、何をパクったり、何をどうアレンジするか意思決定をしてきました。**意思決定は学校長が責任をもって行ってきました。**教員からの反発があるときは、**どのようにすればできるのか、教員に聞きながら一緒にやってきました。**また、豊田にはそれらをデータとして分析して学校の取り組みや方向性が誤っていないか調査をしてもらったり、研究をしてもらったりしています。まずはどんな学校にしたいか。そして、そのためにはどのように向かっていくか。その**理想の実現のためには「徹底的にパクる」、これをTTPと私たちは呼んでいます**。	
	10	結局豊田さんって、どのような位置づけでサポートされていらっしゃるのでしょうか？　お金はどこから？　（もし説明されていたら申し訳ありません。）	豊田は2022年度より東金町小学校に関わっています。2022年度から2024年度までは大学院生と学校の職員として勤務をしていました。2025年度からは大学教員になりましたが、週に１回ほど東金町小学校に呼ばれれば伺って一緒に授業を考えたり、今回の発表を一緒に考えたり、JAETの研究を一緒にしたり、初任者研修をしたり、ICT研修をしたりしています。具体的には以下の通りです。 2022年度は週に１～２回ほど、ほぼボランティアのような形で大卒１年目で教職大学院１年生をやりながら関わっていました。 2023年度は週に２～３回ほど、SSS（スクールサポートスタッフ）として教職大学院２年生をやりながら、教員免許はあるのでたまに授業をしたり、先生たちと一緒に授業を作ったり、授業を支援したり（ICTも特別支援も）していました。 2024年度は週に４回ほど、EA（エデュケーションアシスタント）として博士課程１年生をやりながら、校内研究や校務の情報化、授業支援など学校が必要としてくれればなんでもやっていました。 今年度からはお金を少しいただいて東金町小学校に行っていましたが、昨年度までは職員でしたのでお金はかかっていません。 専門は教育工学、教師教育、学習科学で、授業づくりから、教員の働き方改革、校務の情報化などを幅広くやっています。声をかけてくれれば喜んで一緒に仕事します（お金よりも一緒に仕事したいです）。	

ディスカッション	11	探究、とてもしていきたいと思っています！その上でねらいと評価はとても困っています。ねらいをどう定めていったのか、教えていただきたいです。総合の探究のサイクルを元にされましたか？	正直悩んでいます。今の答えは「パッション（情熱）」かなと（by 河村校長）。 そもそも実は本校で教員にとったアンケートでは、ねらいを定めるかどうかにも教員間の格差があります。この理由を尋ねると、「ねらいがある方が教育的」「ねらいがあると見通しがもてる」。一方で「見通しがもてるのは探究ではない気がする」「やってみたら次のねらいを子どもがつくるから教員がねらいをもつものではないのでは？」という意見があります。 この答えは分かりませんが、子どもたちは探究を始めてからは「パッション（情熱）」を学習や生活に向けてくれる姿を見せてくれています。だから、「探究をしてみて、この力が足りないな」「こういった力を養いたい」と教員が思えれば、それは各教科・領域等で育むような授業改善のヒントになるのではないでしょうか？ 探究をするから習得や活用、各教科・領域等の必要性に気付くのは大人も子どもも。そして、探究で生み出された「パッション（情熱）」がそれらを支えたり、そこで学んだものが探究で発揮されると、「習得－活用－プロジェクト－探究」をつなぎ、往還するカリキュラムには意味があったのではないかと思います。 探究のサイクルはアジャイル学習を考えるときには参考にしました。そして、活用やプロジェクトでアジャイル学習を経ている子どもたちは探究でもアジャイル学習の学び方はしてくれている気がします。	探究学習と言っても各学校によって取り組みはさまざまのように思います。本当で言うと、探究的な学びとして、教科の文脈で実施している教科型のプロジェクト、教科横断型のプロジェクト学習、個人探究と３つあります。教科型プロジェクトおよび教科横断型プロジェクトは、関連のある教科の評価の観点で評価します。個人探究については、今年度から評価指標を新たに作りました。それは、保護者と児童の探究でどのような力が身についていると思っているかアンケート調査をしたものをもとに、探究担当者で議論し評価指標を作成しました。課題解決力、自己調整力、コミュニケーション能力、レジリエンスの４つです。さらにそれぞれの具体的な評価項目を見出し24の評価項目を作りました。個人探究については、非認知能力を育成する学びと位置付けています。今までは、まなぽーとと言うデジタルポートフォリオに築成したものをもとに、子どもの学びを見とっていました。しかし、子どもの記述だけでは、探究の見取りの教師のレベルによって差が出ると考えました。どの先生も評価指標をもとに評価活動に参加できるようにしたいと考えています。ちなみに、今までは各学年の探究リーダーがその学年の評価を主に担当していました。公立の学校での探究学習は、教科横断型のプロジェクト学習にあたると考えています。本校では、子どもの興味・関心をもとにしてプロジェクトを考える場合、教科を発展させてプロジェクト型にする考え方と２通りあります。詳しくは、今年1月に出版した「挑戦し続ける学校SOLAN」を読んでいただけたらと思います。基本的には、探究サイクルで単元を構成します。教科型プロジェクトの場合は、ミッションプランというプロジェクトの目標、育成する資質・能力、学習計画等を説明して活動が始まります。プロジェクトの場合は、２つの方法によって、導入の仕方はさまざまです。
	12	①「教師=教える者」という考えを持った教師はいらっしゃいませんか？その場合、探究でも教えてしまう、子どもに指示を出す、管理してしまうようになりませんか？　②関連して、探究でそういった教育観にならないように、どのように教員研修をなさってますか？	①こちらは豊田の研究がまさにこれを調べるものです。これは少しずつ変えていくしかありません。東金町小学校の教員を対象にした研究では、東金町小学校の勤務年数とICT活用指導力には正の相関が認められ、教員が直接的に教える直接的教授・学習観ではなく、児童生徒とともに授業をつくる構成主義的教授・学習観が東金町小学校２年目以降の教員はICT活用指導力とともに高まる傾向にあります。そして、この教員の教授・学習観の変化につながったのは日々の授業改善であり、日々の業務でした。教員が変わったから児童が変わるのではなく、教員が価値観は変わっていないけれどまずはICTを活用した授業や児童主体を目指した授業をやってみる。そして試行錯誤する。その結果、児童が変わる。児童が変わったから教員の価値観が変わる。教員の価値観が変わったらまた実践が変わる。ただ、ICT活用は地道にするしかないので、校務の情報化をして教員の基本的なICT活用指導力は高める。その上で、教員の価値観が変わっていけば、少しずつ授業でICT活用し、少しずつ学習の主体も教員から児童に移行していく。そんな変容が見られています。興味があれば豊田の研究を見たり、豊田までご連絡をください（toyoda.masato@nittai.ac.jp）。 ②上記のように、研修だけで教員は変わるわけではありません。だからこそ、本校の取り組みでは研修の充実は５段階中４段階目に位置しています。ただ、教師主導にならないようにするためには、管理職が明確に児童主体がよいとする教員に指針を示し、それを価値づけし、大学教員もそれと同じ指針で価値づけをすることは行っています。そもそも、どのようにしたら児童主体の授業にするのか、授業はどのような順番で考えるのかなどの研修を豊田に依頼することはあります。しかし、それ以上に校内研究授業やどの授業も管理職も北澤先生も、児童主体の学びがよいという明確な指針と根拠を常に示しています。	①「教師=教える者」という考えを持った教師はいらっしゃいませんか？その場合、探究でも教えてしまう、子どもに指示を出す、管理してしまうようになりませんか？ ・います。そもそも学校文化として、子どもは知識を授かるもの、教員は知識を授けるものというという構図が教員に染み付いているのだと思います。効果効率よくという視点から考えるとその方が教員はいいはずです。しかし、子ども視点で考えると、なぜこれを学ぶのか？と学ぶ意味がわからないまま、受け身の姿勢が作られていくわけです。solanでは、児童生徒を子ども扱いしない！という文化があります。したがって、私自身、授業は子どもとともに創る作品だと考え、教師はもちろんのこと、子どもにもそのような意識を持って授業に参加するように伝えます。だから、わからないときはわからない！と言えるのだと思います。また、上学年であると教科学習の時に、自分はこう思うと！ホワイトボードに図を書きながら、みんなに説明しようとする子どももいます。それを教員は静止したりはしません。個人探究を軸にしているからこそ、先生方も自分の意識を変えないといけないわけです。そのためには、週２回の研修で先生方と目指す子ども像である自立し自律した学習者を育成するためには、どのように授業をデザインすれば良いかを話し合います。そして、全員一回の公開授業もしてもらいます。２回の研修の一回は、授業力向上のための研修、もう一回は、カリキュラムの理解、探究的な学びや評価等の研修になります。 ②関連して、探究でそういった教育観にならないように、どのように教員研修をなさってますか？ ①で述べたように、カリキュラムの共通理解をする中で、個人探究とプロジェクトの２つのグループに分かれて学年の取り組みについて共通理解を図る場を設けています。また、公開授業をもとに、本校の５つの学習様式と関連付けて研究者である泰山先生に話をしてもらっています。また、探究については保護者ミーティングで出た話題等は、全教員にも共有しています。例えば、情報交流会をしたときに教員のファシリテートの仕方について疑問を投げられたときは、自分たちの話し合いを活性化するための支援のあり方を話し合うこともあります。
	13	大人の答えは正解ではない場合がある。瀬戸ソランさんでは、三宅先生がじっくり待っていた。この、待つという時間を大切にしていくのは（静かな間）教師としては辛いけれど、待つことの大切さを知りました。		そうですね。個人探究は、子どもが学びを創る時間です。それを1年生から子どもと共有しています。学びの主導権は子ども。私たち教員は、サポーターに徹する。必要な時にしっかりと子どもの声に耳を傾け、一緒に考え、問題を解決していくようにしています。ただ、最初はなかなか難しいですね。教員は知識を授けるものという学校文化が染み付いているので。子どもの潜在能力はすごいですよ。なんとか自分で乗り越えていこうとします。そのためにも教科等で知識・技能をしっかりと習得させておくことが重要です。
	14	①どちらの学校も保護者が探究に関わっておられると思います。それをしようと思ったきっかけは？（保護者が授業に入ることにネガティブに感じる学校や教員も一定数いるのでは？） ②人的資源の向上以外で、保護者が入ることのメリットは？児童、教員、学校にとって何がプラス？	①本校は探究の保護者サポーターはそこまで集まっていないのが正直なところです。ただ、フィールドワークや人手が欲しいときには保護者の方に協力をお願いしています。これはミシンやプール、まち探検でも行っているので他の学校とそこまで変わらないかなと思います。保護者が学校に対して肯定的だからこそ、授業にもヘルプで入ってきてくれています。 ②学校の日常を保護者が見てくださることで、学校での指導に対しても点で評価しないでくれたり、学校の取り組みを認めてくれたりすることはメリットかなと思います。児童にとってはさまざまな立場の方が見てくれることは良いのかなと思います。学校にとってプラスという考え方が難しいのですが、子どもたちの学びにつながるのであれば基本的には全てプラスと捉えています。学校が閉じる時代は終わったと思っています。一方で、あくまで最後に責任をとるのは学校であり、教員であり、何より学校長です。保護者に対して、明確にどんな学校にするためにどんな手助けが欲しいか明示することも大切だと思っています。	学校をブラックボック化しない！です。保護者サポーターと教員は同じサポーターという立場で話をするようにしています。探究の前にミーティング、終わったらリフレクション。保護者サポーターも率直に意見を伝えてくれます。違う視点での意見は、私たち教員の探究に対する見方・考え方も広げ深めてくれます。確かに、保護者が学校に入るといろいろなものを目にします。それが気になる教員もいらっしゃると思います。しかし、未来を創る子どもをともに育てていこうという思いを持つためには、教員が日々などのように子どもと関わっているかを知ってもらうことが重要だと考えます。色々な方がいらっしゃいますが、まずは探究応援団を増やすためにも、保護者自身も取り組んだことのない学びを一緒に体験してもらっています。